

誌上ギャラリートーク



『こんとあき』(1989年)林明子作・絵、福音館書店刊
原画は宮城県美術館蔵

「絵本のひきだし 林明子原画展」 はじめてのおつかい、こんとあき、そしてひよこさんまで 2017年4月15日[土]～5月28日[日]

『こんとあき』はぬいぐるみのこんと女の子のあきが旅をする絵本です。二人はさきゆうまちに住むおばあちゃんの家を目指して電車に乗ります。電車でひとりぼっちになったり、さきゆうでは大きな犬に出くわしたり…。二人の旅は不安と恐怖もいっぱいです。絵本作家・林明子さんはそんな子どものふとした瞬間の表情や姿勢を繊細に描き出します。

どうしてこんなにも子どもらしい姿が描けるのでしょうか。それは林さんが子どもを描くとき、必ずモデルを観察しているからです。『こんとあき』のあきは林さんの姪がモデルになったそう。他の作品に出てくる子どもたちも親戚の子どもや近所の子どもにモデルをお願いしたと林さんは雑誌の取材で話しています。

実際に砂丘ではさらさらした砂に足がどンドン埋まっています。急いで駆け上ろうものなら体勢は前のめりになり、絵本の中のあきのように全身でふんばる必要があります。そのような描写も林さんが子どもとともに砂丘へ行った体験に基づいているのでしょう。

また、その観察は人物描写だけでなく、風景描写にも活かされています。夕方、紫がかった砂丘や漁火が灯る海。絵本全体を包むあたたかい雰囲気も取材に基づいた風景描写に支えられています。本展覧会では『こんとあき』、林さんの代表作品ともいえる『はじめてのおつかい』などの絵本原画、角野栄子さん作『魔女の宅急便』に寄せた挿絵原画など200点以上を展示します。 [高松市美術館 学芸員 橋美貴]

第1期常設展・Inspired —アイディアの源泉、イメージの継承 2017年4月11日[火]～6月25日[日]

小川 信治《恋文》2006年 高松市美術館蔵

「フェルメール?」「アレッ、どこか変?」「アッ、二人の登場人物がいない!!!」

小川信治による「Without You」シリーズの《恋文》です。本物と見間違え程の超絶技巧で描かれた、誰もが知っている名画の登場人物を画面から消し去ります。本作品は、17世紀のオランダの画家ヨハネス・フェルメールの《恋文》を下敷きに描かれています。

開け放たれたドアやカーテンから、奥の部屋を覗き見しているような構図。「読み解く絵画」といわれるオランダ風俗画の寓意的象徴物は残されています。シターン(楽器)と床のサンダルは、恋愛を暗示。立て掛けられた箒、しわくちゃの楽譜は恋愛に夢中な事を。二枚の画中画のうち、「風景画」の旅人は恋人が遠くに居る事を、「海景画」の船は恋人の心情を暗示。この恋愛の行方は…、と想像が膨らみます。でも、登場人物の居なくなった静寂な室内に、人物の表情を見る事はできません。超絶技巧で描かれ、余りにも違和感なく自然に見える情景には、最初から登場人物は居なかったのではないかとさえ思えてきます。そこにはもう一つの世界が広がっているようです。

当館所蔵作品を様々なテーマで紹介する常設展。今回は、福田美蘭、森村泰昌、鬚嘔、マルセル・デュシャン等による、よく知られている名画や身のまわりにある商品イメージ等を元にしたオマージュやパロディの楽しい作品が展示されます。ぜひご覧ください。 [山上紹代]



小川信治《恋文》2006年 高松市美術館蔵

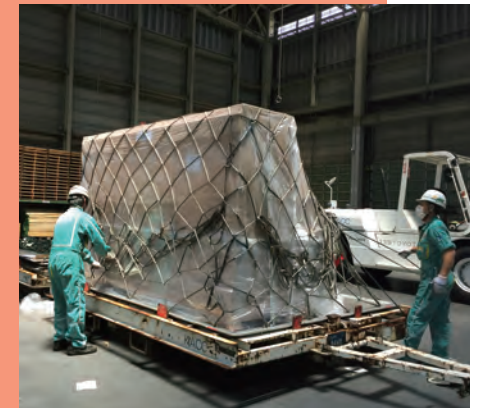
旅する 高松市美術館コレクション

2016年5月18日から2017年4月7日にかけてフェラガモ博物館(イタリア・フィレンツェ)で開催されている「Role Play across Art and Fashion」に、当館所蔵の森村泰昌《肖像(泉1、2、3)》(1986-90年制作)を4ヶ月間展示していました。会期が長いので、当館の作品は4ヶ月間に限定しての貸出になりました。

高さ2mを超えるパネル3枚組の大型の作品のため、輸送や展示について事前に何度もやり取りの上、貸出が決定。高松市美術館の収蔵庫から輸送用木箱に入れられて、搬出されます。イタリアまでの輸送は貨物航空機で行われ、クーリエである私も一緒に貨物機に乗り込みました。航空会社もCargolux Italiaという聞きなれないもので、航空チケットも手書き。搭乗手続きの際も、パイロットの方々と一緒に待ち合わせて荷物検査に向かい、全てが一般の旅客とは別に進んでいきます。貨物機は、コクピットの他6席しかなく、あとはコンテナを積むレールが通った巨大な空間になっていました。香港、カザフスタンを経由し、イタリア・ミラノのマルペンサ空港に着きました。到着後はイタリアの美術作品搬送業者と税関審査などを経て、ミラノからフィレンツェへとトラックで約4時間輸送しました。

次の日、いよいよ作品を展示します。フェラガモ博物館は、フィレンツェの中心地にあるフェラガモ本店の地下にあり、常設でフェラガモの靴製作の歴史について紹介されています。また、定期的にファッションに関係する特別展を開催しているそうです。《肖像(泉1、2、3)》は、作品がプリントされたイッセイミヤケのドレスと向かい合って展示されました。この展覧会のテーマであるファッションとアートの関係性が見てとれる作品であり、この展覧会に出品できたことを嬉しく思います。返却時は、作品を入念にチェックし、梱包し、またトラックと貨物航空機で日本まで持って帰ってきました。

外国での一人での行動、英語でのやり取りや作品の展示方法のチェックなど緊張することばかりですが、現地の学芸員や業者の方々との出会いは何にも代えられないものです。また高松市美術館の作品が世界中の方に見てもらえることも素晴らしいことですね。次はどの作品がどの国へ旅するのでしょうか。 [高松市美術館 学芸員 石田智子]



貨物航空機に乗せるために特別な梱包をします。



貨物機の内部。貨物がレールに沿って積まれていきます。



フェラガモ本店です。この地下にフェラガモ博物館があります。



作品を設置する現地の業者の方々。



イッセイミヤケのドレスと並べて展示されました。

編集後記

◎今年も当たり年。やはり花粉はやって来た～。だけどもお花見はしたい私です。 [田中えり子]

◎時間と余裕があれば画家の故郷を訪れたいと、いつも思っていました。ダリの作品に出てくるカダケスの浜辺を歩いてみたいという夢が、またひとつ増えました。 [岡岡洋子]

◎春の気配は光から始まると言います、春はもうそこまで来ています♪ [横井真由美]

◎クラナハ展にいきました。クラナハのサインになっている蛇の紋章。蛇に蝙蝠のつばさが生えルビーを咬んでいるというおしゃなデザ

イン。絵のどこにあるか探すのも楽しめました。 [皆見礼子]

◎アニアル展で紹介した作家の活躍は気になります。雑誌、ネットで作家の名前を見つけると嬉しくなります。 [三好ひさこ]

◎脳科学者・茂木健一郎さん曰く、現代アートは、脳も柔らかく、感性も柔らかくして見る事。「現代アート鑑賞は、脳と心のアンチエイジング」だそうです。アンチエイジングの言葉に弱い今日この頃です。 [山上紹代]

◎春です。鳥取砂丘でもコウボウムギなどが開花するそうです。 [高松市美術館 橋美貴]

〒760-0027 香川県高松市紺屋町10-4 TEL: 087-823-1711 FAX: 087-851-7250
発行: 高松市美術館 編集: civi & 橋美貴(高松市美術館) デザイン: 福田千恵(高松市美術館)



アンリ・ルソー《詩人に靈感を与えるミューズ》
1909年/ブーシキン美術館蔵

カーネーションの花の前の恋人同士。
男性は詩人のギヨーム・アポリネール。女性は彼のミューズである画家マリー・ローランサン。
ルソーは毎日のようにポーズをとったアポリネールの手や顔を、メジャーで測って描いています。
その割には恋人達はでっぷりと寸胴で描かれています。
「失礼しちゃうわ。もう少しスタイルいいんだけど」と彼女は不満そう。
しかし画家はそんなことお構いなし。
画家は古いシャンソンを唄いながら楽しそうに描いていました。
ここはどこでしょう？
周囲のたくましく描かれた植物のせいで、ジャングルのように見えるでしょ。
実はパリのリュクサンブール公園なんです。
樹々の間から青空がのぞいているでしょ。
その様子をずーっと見ていた樹木である“私”は…、
二人の愛が永遠であるように左右からアーチを作って祝福しています。
[皆見礼子]



美術図書コーナーから

リニューアルオープンを機に1階へ移設した新しい美術図書コーナーは、どなたにも気軽にお越しいただける開かれた場所に生まれ変わりました。美術、芸術、郷土芸術に関する本や雑誌、所蔵作家の画集・図集、展覧会図録など美術館ならではの蔵書を厳選し公開しています。館外からも様子を窺うことができるガラス張りの壁面には、黄色い丸が眩しい、美術家の杉山知子氏による作品《8 relations》があります。ひとつでは「個」でしかない丸が複数繋がることによって、新しい「関係」が生まれる様子が描かれており、皆様と当館、作品、本などの様々な新しい「出会い」を示唆しています。
美術図書コーナーの入口に立って、まず目に映るのは「赤と黒」の本棚です。当館所蔵作家の藤本由紀夫氏による選書で、インスタレーション作品のひとつです。明るく開放的な雰囲気から、「個人の書齋に遊びに来ているようだ」などのご意見をいただいております。
「高松市美術館の美術図書コーナーには何か面白いものがある」「新しい発見がある」と感じていただけるよう、定期的に蔵書を入れ替え、新刊コーナーは毎月更新しています。特別展開催時には、展覧会をより楽しんでいただけるよう関連資料を公開しています。

皆様に新しい出会いと発見がありますことを願いつつ、ご来室を心よりお待ちしております。
[高松市美術館 司書 嶋崎寛子]



プラス
こども+から

2016年3月に新しく中2階に誕生した「こども+ (こどもアートスペース)」は、子どもから大人まで誰もが「作ること」を楽しめる場所です。
ここでは、アートプログラム「ふらっとアート」を定期的に開催しており、ポスターを使った紙袋づくりなどのちょっとした工作ができます。予約・参加費は不要です。また子ども向けの美術図書や所蔵作家の絵本などの閲覧スペースや、楽しく遊べるバスル等も用意しています。他にも子ども向けワークショップを開催することもあります。
「こども+」を1番多く利用されているのは親子連れの方々です。休日には、未就学児から小学生のお子さん連れが楽しんでいます。特に夏休みなどの長期のお休みには、市内の皆様に加え、多くの観光客や外国人の方も来室されます。
「展覧会を親に来たついでに」「美術館の近くまで来たから」と気軽に立ち寄りいただけるスペースです。「こども+」が、美術館をより身近に感じていただけるきっかけになればと思います。皆様のお越しをお待ちしております。
[高松市美術館 こども+担当 川染奈緒]



▲こども+文庫



▲ワークショップの様子

10/9 [日] 子どものアトリエ

「光のどうぶつ」
(講師：美術家・谷澤紗和子氏)

アシスタント

切り紙で好きな動物を作り、懐中電灯で光をあて壁や床に映る影を鑑賞しました。子どもたちにとって、好きな動物を描くことは難しいことではないようですが、切り抜いて光をあてたとき自分の動物がどう見えるか、輪郭だけの影ではつまらないので工夫します。目の部分をくりぬいたり、口や耳にも少し切込みを入れると表情が出てきます。出来上がった切り紙のうさぎ、りす、いるか、たくさんの動物たちを横に張った糸に結び付けぶら下げました。谷澤さんには七夕飾りのイメージがあったようです。懐中電灯を切り紙に近づけると映る影はどうか、離すとどう映るのか、暗い部屋の中で動物の影が大きくなったり、小さくなったりします。切り紙がゆらりと揺れると影も動き出し、子どもたちの中にすぐにも物語ができそうな、そんな空間が出来上がりました。
[三好ひさこ]



撮影：木奥恵三

10/30 [日] ワークショップ

「EXPLORING THE CITY」
(講師：建築家グループ・ドットアーキテツ)

アシスタント

美術館を出発し、街をぐるり探索します。街は何で出来ているのか。建物の玄関や外壁、歩道など、街を作っているものの表面に紙をあて鉛筆で擦り凹凸を写し取りました。この探索は誰もが夢中になり何枚も集めました。
「自分が集めた模様の中に何かの形を探してみよう」とドットさんが言います。よく見ると、黒い鉛筆の色の中に、動物の顔のように見える部分がある！形が見つかったら、その輪郭をなぞります。
集めた模様からひとり4点選び、ドットさんが全員の模様をひとつにまとめて版を作りました。Tシャツにプリントするためです。プリントはシルクスクリンという技法で、版の上にスクイージーという道具でインクをのばす作業も体験しました。探索した街をTシャツに写し取ることができました。
[三好ひさこ]

11/12 [土] ~ 12/18 [日]

ギャラリートーク

特別展「奇才・ダリ版画展」

ギョロリと光る大きな目と、トレードマークの口髭。日本でも大変人気がある天才ダリの作品を皆様にご紹介しようかと、大変悩みました。今回展示された版画は、ダリが円熟期から晩年にかけて制作したもので、これまであまりなじみがありませんでしたが、そこに描かれた夢や無意識の世界がそのまま伝わってきました。スキャンダラスでドラマチックなダリの人生と、一度見たら忘れられない「とろける時計」や、ダブルイメージ等の多彩な表現を紹介するのに熱が入ってしまいました。宗教的なテーマを扱った作品が多かったのですが、そのような作品の中にもダリ特有のコミカルな表現が見られ、トーク中にお客様がぐすりとされる場面もありました。時代を先取りするセンスと、シュルレアリスムのエネルギー溢れるダリワールドに、来場者の方々と共に、ぐいぐい引き込まれていったギャラリートークでした。[富岡洋子]



CIVIの主な活動 2016.3月-12月

3/26 [土] ~ 4/17 [日]

ギャラリートーク

特別展「リニューアルオープン記念コレクション展」

1年余りの改修工事を終えて、無事リニューアルオープンを迎えた高松市美術館。こけら落としの特別展は、国内外で高い評価を受けている当美術館の現代アートコレクションからよりすぐりの約110点を展示した展覧会です。注目作品としては、田中敦子の《電気服》が展示されました。この作品は当館人気作品のうちのひとつで世界を旅する売れっ子です。電球が点滅すると、みなさん目が釘付け！他にも日本の現代アート界を代表する作家の作品が全館あげて展示されました。
私は特に石田尚志の映像作品《REFLECTION》に心惹かれました。光が変化していく様子をコマ撮りアニメの手法で膨大な時間をかけて作った作品です。展示室のガラスケースや床なども利用して映写し、ダイナミックで、とても素敵でした。この展覧会で、みなさんに現代アートの魅力と表現の広がりを楽しんでいただけたことでしょうか。
[佐々木真理子]



10/8 [土] ~ 11/6 [日]

ギャラリートーク

特別展「高松コンテンポラリーアート・アニュアル vol.05」

アニュアル展は今回で早や6回目となりました。今回は「見えてる風景／見えない風景」のテーマのもと、4人と1組のアーティストの方々に参加いただきました。
最初の部屋は、流麻二果さん。一見抽象画に見えますが、人の気配や残像を盛り込んだ、明るく透明感のある油絵です。この部屋にいらると自分が色に染まっていく感覚になりました。次は、ドットアーキテツさん。4人の建築家集団です。建築家の作品だけあって、ごちゃごちゃした中に安定感と安らぎを感じさせる作品はさすがでした。3番目の部屋は、谷澤紗和子さん。和紙を使った切り絵です。和紙を通して見る光と影には、日本人なら誰もが感じるであろう心地よさがあります。また、信楽の土に貝を埋め込んだ焼き物は、貝が燃え尽きてできた穴から妄想が生まれ出るようでした。4番目は、映像作家の伊藤隆介さん。自ら模型セットを作り、それを小型CCDカメラで撮影して、リアルタイムに映し出す手法です。東日本大震災で事故を起こした福島第一原発の建屋内をテーマにした作品に、薄れつつあった記憶が呼び覚まされました。最後は、メキシコに留学中の来田広大さん。写真かと思って見ると、実はチョークで描いてあるという意外な作品です。
どの作品も表現方法は違いますが安らぎを感じて、それが私にとっては見えない風景だったのかもしれない。
[楨井真由美]

10/8 [土] ワークショップ

「手描きのアニメを作ろう アシスタント」
(講師：映像作家・伊藤隆介氏)

アシスタント

丸い物体(リール)が2つ付いた映写機。16ミリフィルム、私が子どもの頃には小学校で見た事がある懐かしいものですが、今の子どもたちにとっては初めて見るもので、カラカラカラと回り出した時にはビックリした様子。映画の原理を教えてもらい、パラパラ漫画や筒を回すと馬が走るように見える装置(ゾートローブ)を実際に使ってみたと、みんなの映画作りへ。透明なフィルムを1メートルくらいもって1コマ1コマ油性ペンで描きます。24コマ描いてやると1秒。思い思いのアニメーションを描いて全員の作品を繋ぎます。参加者、そしてお手伝いの中学生、アシスタントの私たちも加わり、全部で2分ほどの作品に。自分が作った5秒を含め、どんなふうに見えるのか？ドキドキの緊張と、見えたあとの達成感。新しい体験ができた時間でした。子どもたちも映画を観るとき、ふと今日の事を思い出すのかも…。[田中えり子]

